

# 長崎だより

長崎の情報を  
お届けします

FFG調査月報の姉妹誌「ながさき経済」を発刊している、ふくおかフィナンシャルグループの長崎経済研究所。長崎の旬な情報を提供するコーナー「長崎だより」の今月号は、一般社団法人 山と海の郷さいかい 代表理事 橋本 ゆうき様から「『誰もが自分らしく、すこやかにいきいきと在る世界』を目指して」と題し寄稿していただきました。

長崎経済研究所による「ながさき経済web」随時更新中!



当研究所が発信する最新の情報をメールでお届けします。

メールマガジンの登録はこちら▶



ながさき経済web画面

## お問い合わせ

### 株式会社長崎経済研究所

長崎市銅座町1番11号  
十八親和銀行本店内  
TEL095-828-8859



### 長崎経済研究所とは

長崎県の経済・社会・産業動向などに関する調査研究及び企業経営や県民の生活のお役に立つ情報をご提供するとともに、各種経済・文化団体の事務局活動等を通じて、地域社会に貢献することを目指しております。





# 「誰もが自分らしく、すこやかに いきいきと在る世界」を目指して

寄稿 橋本 ゆうき

## はじめに

はじめまして、橋本ゆうきと申します。長崎市出身、2018年より西海市へ移住し、現在は(一社)山と海の郷さいかいの代表として、地域の皆さんと共に「農林漁業体験民宿(体験民泊)」事業に取り組んでいます。西海市へ移り住む以前は、地元タウン誌の編集長をしており、「雑誌」という媒体を通して、地域の魅力やローカルな暮らしの楽しさを発信してきました。しかし「百聞は一見に如かず」、現在は「体験民泊」を通して、自然と共にある西海市の暮らしの魅力や豊かさを、お客様に自分自身の五感を使って感じていただく……そんな機会を提供しています。今回は体験民泊に取り組む意義や、地域における体験民泊の可能性について、お話させていただきます。

## 西海市で出会った 理想の暮らしと、 それを伝える体験民泊

そもそも、私がいわゆる「田舎」や「地方」と呼ばれる「小さなコミュニティ」での暮らし、グローバルゼーションに対する「ローカリゼーション」といったキーワードに関心を持つようになったのは、大学時代、ニュージーランドに短期留学をしたことがきっかけでした。国で一番のメインストリートのお店が夕方5時には閉まり、人々が家族や友人と過ごす時間や、自然



## Profile

一般社団法人 山と海の郷さいかい  
はしもと  
代表理事 橋本 ゆうき



1988年長崎市生まれ。富山大学芸術文化学部にて、伝統工芸やクラフトデザインについて学ぶ。在学中、ニュージーランドへ短期留学したことを契機に、ローカリゼーションやまちづくり、コミュニティデザインといった分野に関心を持つように。2011年、(株)ながさきプレスへ入社。2015年より同誌編集長を務め、タウン誌という媒体を通し、まちづくりや地域固有の魅力の再発見・編集・発信に取り組む。2018年、地域おこし協力隊として西海市へ移住。地域の皆さんと共に農林漁業体験民宿事業に取り組み、2020年より(一社)山と海の郷さいかいの代表理事を務める。

<https://yamatomumi.com>

の中で過ごす時間を大切にしたいのか」を見て、「自分はどうか生きたいのか」「どんな時間を幸せと感じるのか」「本当の豊かさとは何か」と、思いをめぐらせたものです。

以来、「誰もが自分らしく、すこやかにいきいきと在る世界」を目指して、働き方・暮らし方の多様性や、人とのつながりが感じられる小さな地域コミュニティでの営みや文化などを大切にしながら、タウン誌の編集など、さまざまな活動を行なってきました。

そんななかでめぐりあった土地こそ、今、私が暮らす西海市です。



地産地消や物々交換が当たり前のこの土地で、農業体験や食の体験を通じ、この土地の暮らしの魅力を伝えていきたいという想いに深く共感した。



2016年、西海市移住前に制作した農林漁業体験民宿事業の最初のパンフレット。

現在、代表を務めている体験民泊のパンフレット制作をご依頼いただいたことが、ご縁のはじまり。取材のために西海市を訪れ、農家や漁家の皆さんに出会った私は、「こんなところに、自分の求めていた暮らしがあった！」と心から感動しました。西海市はひと昔前まで、陸の孤島と呼ばれた僻地。市内に高速道路や鉄道は通っておらず、西海橋や大島大橋が架かっている今でさえ、交通の便は決して良くありません。しかし、その不便さゆえに、今なお昔ながらの暮らしの知恵や伝統的な食文化が息づき、半自給自足的な生活が残っていたのです。

そんな西海市の暮らしの魅力を、体験民泊を通して、子どもたちや都市で暮らす人々に体感してほしい——地元有志の皆さんの熱い志に、私は深く共感しました。それまでペーパーや雑誌という「紙媒体」を通じてアクションを続けてきた私ですが、「体験」という手段でダイレクトに想いを伝えられることに、ワクワクした

のです。そうして私は、2018年に西海市へ移住。地域おこし協力隊として、地域の皆さんと一緒に体験民泊事業を推進していくことを決意しました。

## ローカリゼーションと地域コミュニティ

現在は一般社団法人となった私たちの団体「山と海の郷さいかい」ですが、私が関わり始めた2016年当初は、まだ立ち上がったばかりの任意団体に過ぎず、市内の民泊家庭も10軒ほどでした。そもそも「農林漁業体験民宿」とは2005年、農林水産省が都市と農村の交流を図るために、「農林漁業体験や交流を提供すること」を条件として、一般家庭でも旅館業法簡易宿所の許可を受けられるよう規制緩和した制度であり、大分県の安心院地域などが先進地として知られています。

西海市は、合併前の旧西海町でグリーン・ツーリズム活動が盛んだった

ことから、長崎県で最初に体験民泊に取り組み始めましたが、合併後は足並みが揃わず、活動は10年以上、下火となっていました。そんな現状を打破すべく、「もう一度頑張ってみよう！」と声を上げたのが、パンフレット制作を依頼してくださった有志の皆さんだったのです。

活動を共にするようになって目にしてきた皆さんの暮らしは、皆さんにとっては「当たり前」、しかし私にとってはすべてが「新鮮」な暮らしでした。私は西海市に来て、お米やみかんを買ったことがありません。皆さんが「食べんね〜」と分けてくださるからです。「このお米はあのおじちゃん、味噌汁の味噌はあのおばちゃんだし、わかめはあのおばちゃん、煮付けのアラカブもさっきいただいたし……わっ、この漬物も」と、食卓の料理のすべてが、土地のものやおすそわけて完結していることもしばしばです。

最初はこうしたおすそわけや、地域の人々の優しさを、どこかプレッ



おすそわけは日常茶飯事で、いつのまにか冷蔵庫が大きく(笑)。日々、地域の皆さんとのつながりを感じる。

シャーに感じることもありました。都市での消費的な暮らし、等価交換に慣れ親しんでいる私は、「もらったら返さなければ」と無意識に感じていたからです。しかし「等価のお返しをする」ということは、その都度、「相手との貸し借りをフラットに精算する」ということ。あえて貸し借りをつくっておくことが、コミュニティの人々の間にゆるやかなつながりや関係性を担保しているのだと気がついてからは、自然と共にある、しかし常

に自然の脅威とも隣り合わせのこの土地における、支え合いや助け合いの知恵なのだと感じるようになりました。

そんな地域コミュニティを、煩わしい、面倒だ、と捉える人も多いでしょう。かくいう私も、時にはこのつながりの深さを重荷に感じることもありまます。移住者やよそ者であればなおさら、こうした狭く親密な地域コミュニティにうまく馴染めないこともあるかもしれません。しかし、「いつも見られている」と感じるか、「見守られている」と感じるかは自分次第。台風や豪雨で家の周りに被害が出た時、何も言わずともパツと駆けつけてくれる皆さんの優しさやたくましさにはやはり感動しますし、「ついでだから」と我が家の周りの草刈りまでしてくださるときには、感謝で胸がいっぱいになります。

自分一人の幸福ではなく、いつも周囲の人々や環境にまで気を配る。結局はそのことが、同じコミュニティの中で生きる自分自身の幸福にもつ

ながる。「情けは人の為ならず」を体現するかのように、くるくると、皆さんの優しさや思いやりがコミュニティの中で循環する様子は、まさにローカリゼーション的だな、と感じます。

## 生き方、暮らし方の

### 選択肢を広げてくれる

#### 「体験民泊」

「田舎へ泊まろう」さながら、実際に地域の一般家庭に宿泊して食事や体験を共にする体験民泊では、こうした地域コミュニティならではの営みを肌で感じるができます。あれも持って行け、これも持って行けと、おみやげでいっぱいのお抱えで帰るとき、損得を度外視した地域の皆さんの優しさやあたたかさ、贈与的な営みに心打たれるはずですよ。

それだけではありません。「晩御飯のおかずのなかね」と言いながら釣竿片手に海へ行き、「ちよつと緑の足りんね」と言いながら畑へひとつぱしりする、そんな皆さんの暮らしを

見ると、食べ物は「買う」ことが当たり前だと思っていたのに、「採る」だの「獲る」だの「作る」だの、といった選択肢もあるのだと、なんだかハッとさせられるのです。

あるいは、電気、ガス、水道が止まった時……。薪で湯を沸かし、山や海から食べ物を得る術を知る民泊のお父さんお母さんなら、しばらくは生きていけるでしょう。もちろん、皆さんも普段は文明の利器(?)を使って生活しており、家に大きなテレビもあれば、スマホだって使いこなしています(笑)。一方で、昔ながらの生きる知恵もあわせ持ち、衣・食・住のあらゆることを他人任せにするのではなく、自分の手中に握っている。その強さやたくましさや学ぶことは、本当に多いものです。

2016年に発足した「山と海の郷さいかい」の民泊家庭は、2022年現在、40軒を超えるまでに成長しました。2018年、たった1枚から始まった修学旅行の受け入れも、現在では年間2,000名ほどの予



晩御飯のおかずを求め、アジ釣りへ。



農家でなくとも家庭菜園や自家用の田畑を持つ人が多い。  
このお父さんも普段は海の男!



当たり前のように家にかまどがある風景。「タケンコ(筍)ばゆがくとに、ガスでやっとなれるもんね! 薪よ!」



「やっぱり釜で炊くごはんが美味しかね〜」と、お客様にも体験を提供。



林業に取り組むお父さんの山には、昔ながらの炭窯も。子どもたちは薪割りやシイタケのコマ打ち・収穫など、昔ながらの里山仕事を体験する。



昔ながらのかんころもちづくりや、西海市の特産品であるみかん狩りなど、食の体験も充実。



約をいただいています(※2020  
〜21年は、新型コロナウイルスの影響で受け入れてできていません)。

関西や関東の都会で生まれ育った中学生や高校生が、たった1泊でも2泊でも、西海の暮らしの価値観や人々のあたたかさになれるとき……。私がニュージーランドで衝撃を受けたように、「こうでなければならぬ」という狭い常識の檻を抜けて、「こんな生き方、暮らし方もあるのか」と感じてもらえれば嬉しいですし、今はピンと来なくても、やがて社会に出た彼ら彼女らが困難に直面したとき、ふと、地方での暮らしを思い出してくればと考えると思います。

## 農林漁業体験民宿事業の 意義と可能性

この体験民泊のおもしろいところは、取り組む地域によって、その「意義」や「価値」をどこに置くかの考え方が違うところ。どの地域でも市役



所や観光協会などと官民連携で進めていくことが多いのですが、「農林漁業（一次産業）の活性化」という文脈で取り組む地域では「農林課」などが関わり、「交流人口の増加」という文脈であれば「観光課」が関わる、といった具合。しかし私は、地域をあげてより横断的に、多角的に農泊事業を推進することができれば、と考えているのです。

体験民泊の最もわかりやすい利点は、やはり「交流人口の増加」でしょう。修学旅行で訪れることが無ければ、子どもたちは一生、「西海市」を知ることは無かったかもしれません。磨けば光る小さな宝物はたくさんあれど、一般的にはキャッチーな観光資源が無い農村地域へ、体験民泊をきっかけに旅行者が増えるのです。

さらに体験民泊のいいところは、地元の人々とのつながりが生まれることで、交流人口から「関係人口」へシフトしやすいこと。実際に一般のお客様で移住に結びつく事例もありま

すが、将来西海市を再び訪ねたり、暮らしたりしてくれる可能性もあるでしょう。

かたや地域にとっては、当然「お金が落ちる」という経済効果もあります（民泊家庭が5名、修学旅行生を受け入れた場合、1回で3万円ほどの収入になります）。継続的に安定した受け入れ・収入が得られれば、料理や釣り、庭いじりやものづくりなど、自分の好きなことや得意なことを活かしながら、無理なく副収入を得て、そのことがまた、あれもやってみよう、これもやってみようという活力を生み出します。

コロナ禍以前はインバウンド受け入れもあり、自分ではパスポートを持たないおばあちゃんの家にも、中国人や台湾人の方がやってくる、そんなこともありました。月に1度でも、2度でも、若い人や外国人との交流があることは、この西の端の田舎で暮らす皆さんにとって、大きな刺激となるはずですよ。

このように、短いスパンで見れば、

交流人口の増加や地域にお金が落ちることが、体験民泊のメリットです。

しかし、そこからもう少し視野を広げれば、地域の人々のシビックプライドの醸成や生きがい・やりがいづくりにもなっており、健康増進や介護予防といった視点で、福祉的価値もあると感じます。さらには、移住や多拠点生活といった新たなライフスタイルを見据える人々にも、この土地と関わり続けてもらうことができますし、消えゆく暮らしの知恵や文化を継承することの価値や、子どもたち

に伝えていくことの大切さは、いわずもがなでしょう。

こうしたさまざまな意義・効果を有機的につなげていくことができれば……体験民泊は単なる観光目線から一歩踏み込んだ地域活性化の事業として、多くの可能性を示してくれるのではないかと思います。



◀修学旅行で訪れる中学生や、若い世代に向け、「懐かしくてあたらしい暮らし」を伝えている。